# オーディオは脳ましい

52 原島一男

## MJ は90歳

創刊90周年を迎えた『MJ無線と実験』．おめでとうございます．私は，今，日本で最も歴史のあるオーディオ月刊誌に文章を書くことのできる幸運を感謝します．同時に，オーディオという趣味を追求してきた慶びを深くかみしめています．

ここに忘れられない言葉がある．

「音の強さが原音と同じであること」

「音の波形が原音と同じであること」

「原音以外の音の混入しないこと」

日本に初めて放送局が誕生し，無線による音声の伝達が実現したころに創刊された『無線と實験』の誌面に，故高柳健次郎氏が「この三つを理想とすべし」と書かれている．

何と心を打つ言葉であろうか！

このコラムで一度紹介したことはあるのだが，あまりにも名文なので，原文のまま，もう一度，引用させていただく．

「人，犬，馬，牛，猫，狐……等諸動物の発生器官，汽車の車両とレールの摩擦，大砲の爆発，寺の鐘のうなり，浜風に吹かれる松の葉，草葉にすだく秋虫の羽……実の音の発生器は多い．此等のものが動揺すると，其の辺の空気を振動させて音が発するのである．ここに古池を想像し秋の夕べで池面は鏡の様であるとする．そして其の池の面に松の草末の露か何かがポチリ落ちたとする，それをじつと見つめる指輪の様な小さな美しい波紋は白くすんでいる鏡の面を音もなく広めて行きそしてだんだん，とうく消えていつか波の面は元の静寂にもどる．

これと同じ様なことが音の海の中で行はれることを想像して頂きたい．

此の音の伝はるところに耳があれば音は耳の鼓膜をうつてこれを振動する．その振動は各種の器官をとほして脳に音の感覚を起し此れに対する判断をなさしめる．耳とは如何に巧妙に出来た器械であらふか？

我々は音の高さ低さ，強さ弱さはもとより人の声色も楽器の音色もよくききわける」

（『無線放送材料と無線放送装置』の冒頭）

動物の鳴き声，虫の声，それぞれが空気を振動させる．自然と共存する日本人の美意識．オーディオの原点を忠実に表す文章として生き続けて行くことだろう．故高柳健次郎氏は，大正15（1926）年12月，世界で初めてブラウン管による電子式受像に成功，「テレビの父」としてその名を残し，その後，日本ビクターへ入社，副社長，技術最高顧問などを歴任，テレビ放送の実用化，カラーテレビの技術革新，ステレオやVTRの開発など，数多くの業績を残された．

発明王エジソン（1847〜1931）が蓄音機を商品化したのは1877年だったが，1913年には，ダイヤモンド針を使う円盤を発表，レコードの再生音と歌手のナマの声を比較する実験まで行ったという記録がある．この‘高柳論文’が『無線と實験』創刊号に掲載されたときには，SP盤を竹針で鳴らす「クレデンザ」などの名機が存在していた．

そのSP電蓄時代を皮切りに戦後のSP，そしてLP，さらにステレオLP．1980年代にデジタルCDが現われ，今世紀に入るとネットオーディオと再生装置の音源は変遷を重ねて来た．ほかにも，２トラテープ，４トラテープ，カセットテープのことも思い出す．

その間，数えられないほどの技術革新があったわけだが，紙のスピーカーの振動で空気を動かして音を伝えることは，この90年間変わっていない．サイズやデザインの点や小さなスピーカーである程度の低音を

著者の手元にある「無線と実験」